

curvirostre Wollaston, 1873

1 ex., 宮塚山, 12-IX-2012, CZ.

伊豆諸島ではこれまで三宅島, 八丈島, 青ヶ島から記録があり, 最近, 小島・藤澤 (2011) が大島から記録した。

考察

利島は Morimoto & Miyakawa (1985) の報告の中で, 伊豆諸島中もっともゾウムシ上科の記録が少ない島であったが, 今回の調査により同島のゾウムシ相は 1 科 16 種から 3 科 38 種と倍以上に増加した。同報告中で示されている種数面積曲線においても利島は回帰線よりかなり下方にずれていたが, 今回の調査結果を当てはめると回帰線の傾きが修正されるか, 利島が回帰線より上方に位置する可能性が高く, 利島におけるゾウムシ類の種多様性がこれまで考えられていた以上に高い可能性

が示唆された。

今回の調査時期とは異なる春から夏期にかけ集中的な調査を行うことで, さらなる種数の増加が見込まれると考えている。

引用文献

- 小島弘昭・藤澤侑典, 2011. 伊豆大島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. さやばねニューシリーズ (4): 9-11.
 小島弘昭, 2011. 伊豆諸島神津島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. さやばねニューシリーズ (4): 20-21.
 Morimoto, K., 1981. The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 4. Esakia, Fukuoka, (17): 53-107.
 Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of Izu Islands, Japan (Coleoptera). Mushi, Fukuoka, 50 (3): 19-85.
 妹尾俊男, 1987. 東京都に生息するヒゲナガゾウムシ科甲虫類について (I). 教育・研究, 中央大学付属高等学校, (1): 67-84.

(2012年11月30日受領, 2012年12月10日受理)

【短報】フタホシカギアシゾウムシの関連植物

カギアシゾウムシ属 *Bagous* は日本から 21 種が知られる水生・半水生ゾウムシの一群である (O'Brien *et al.*, 1994, 1995). いずれの種も湿性または水生植物に依存していると予想されるが, 実際に国内で寄主植物が確認されている例としては, バッキンガムカギアシゾウムシ *Bagous buckinghami* O'Brien *et Morimoto*, 1994 (寄主: ミツガシワ科のガガブタ *Nymphoides indica* (L.) Kuntze) とヤヤコブカギアシゾウムシ *Bagous spiculatus* O'Brien *et Morimoto*, 1994 (寄主: トチカガミ科のトチカガミ *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer), リュウキュウカギアシゾウムシ *Bagous ryukyuensis* O'Brien *et Morimoto*, 1994 (寄主: オモダカ科のオモダカ *Sagittaria trifolia* L.) が報告されているだけである (吉武, 2009; Yoshitake, 2010; Yoshitake & Yoshida, 2011). 筆者は島根県内のため池において, フタホシカギアシゾウムシ *Bagous kagiashi* Chûjô *et Morimoto*, 1959 の生息地を発見し, 生態について若干の知見を得ているので報告する。

2012年8月31日, 島根県雲南市大東町の沢池 (通称, うしおの沢池: 図1) において, ブラックバス駆除後の生物調査を行うため水生昆虫などを採集している時に, 小型のゾウムシが複数水面付近に浮いていることに気づいた。体に泥が付着していたこと, 水中で泳ぐことから, イネミズゾウムシだと思い込み, 採集してそのまま帰ってしまった。持ち帰った標本を同定する時になり, カギアシゾウムシ属であることにやっと気づいた。

翌9月1日, 再度, 沢池を訪れてゾウムシを改めて観察することにした。池は夏の渇水によって通常時の岸辺はすべて干上がっており, 泥が露出していた。水辺の浅瀬にホッスモ *Najas graminea* Delile (トチカガミ科) とホソバミズヒキモ *Potamogeton octandrus* Poir. var. *octandrus* (ヒルムシロ科) などが密生して生えており (図2), 水草の群落を調べてみると, ゾウムシが浮いてきた。カギアシゾウムシ属で知られる「犬かき」で水中を遊泳する様子が観察できた。ほとんどの成虫は体に泥が付着しており, 体の表面がきれいな状態の個体はわずかだった。浮いてきたゾウムシは水草につかまった (図3)。

生かしたまま持ち帰り, 円筒形の透明容器 (容量1リットル) に水草と池の水, 上陸用のアミ (プラスチック製) を入れて約20個体の成虫を1ヶ月間飼育した (人工気象機で気温24°C, 長日に設定)。最初の数日は水面上でアミに登る個体が多かったが, やがて水中に潜る個体の方が多くなり, 水中での交尾も確認された。成虫は水中でホッスモの茎を食害した (図4)。産卵を期待したが, 水草が枯れたり, 紛れ込んでいたミズメイガの一種の幼虫にホッスモを食べられたりして確認できなかった。この1ヶ月間で死亡した成虫は2頭だけだった。

幼虫の食草が確認できなかったため, ホッスモが寄主植物であるとの断定はできなかった。しかし, 日本産の種にも沈水植物を食べ, 潜水できる種がいることが判明したことは, 日本産カギアシゾウムシ属の生態や寄主植物を解明する上でヒント



図1. 生息地の沢池 (2012.8.31撮影) .



図2. 水辺に密生するホッソモ (沈水植物) とホソバミズヒキモ (浮葉植物) .



図3. 水中のフタホシカギアシゾウムシ.

になったと思われる。特にトチカガミ科の浮葉・沈水植物は注目すべき水草である。

文末ではあるが、沢池での調査の機会をいただいた島根県立宍道湖自然館の越川敏樹館長、フタホシカギアシゾウムシを同定いただき、原稿に適切な助言をいただいた (独) 農業環境技術研究所の吉武啓博士にお礼申し上げる。

引用文献

O'Brien, C. W., I. S. Askeveld & K. Morimoto, 1994. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. *Esakia*, (34) : 1-73.



図4. ホッソモの茎を食べる成虫 (飼育) .

O'Brien, C. W. & I. S. Askeveld, 1995. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae) IV. Three new species from Japan. *Esakia*, (35): 1-15.

吉武 啓, 2009. 茨城県におけるバッキンガムカギアシゾウムシの採集例. *甲虫ニュース*, (167): 11-12.

Yoshitake, H., 2010. A biological note on *Bagous spiculatus* O'Brien et Morimoto (Coleoptera, Curculionidae). *Elytra*, 58: 1-2.

Yoshitake, H. & A. Yoshida, 2011. Discovery of *Bagous ryukyuensis* O'Brien et Morimoto. *Elytra*, New Series, 1: 345-346.

(林 成多 ホシザキグリーン財団)

【短報】キイロチビコクヌストモドキ, 御蔵島からの追加記録

キイロチビコクヌストモドキ *Archaeoglenes orientalis* Sasaji, 1983 は、九州の熊本県小国町杖立で採集された標本をもとに記載された、落葉層に生息する体長2mmに満たない微小なゴミムシダマシである。

本種は日本の特産種で、本州の千葉県以西 (平野, 1984), 伊豆諸島 (上野, 1993), 隠岐 (平野, 2006), 対馬 (上野, 1993), 四国 (Sasaji, 1983; 酒井, 1993), 九州 (Sasaji, 1983; 平野, 1984), トカラ中之島, 沖縄島 (上野, 1993) から分布が知られ、伊豆諸島からは御蔵島からのみ記録されている。ただし、上野 (1993) は標本写真を示しているもののデータを提示しなかったため、御蔵島の記録は見落とされているケースがあるようである。

筆者も御蔵島で本種を得ているので追加採集例を報告する。



図1. キイロチビコクヌストモドキ (御蔵島産) .